



## ヤツデ(テングノウチワ) ウコギ科 *Fatsia yaponica* Decne.et lanch

樹木医 富塚 武邦

ヤツデは葉の形や植栽の多さから、サクラ、マツ、モミジ、ツツジなどに伍して認知度は高い。東北地方南部から四国、九州、沖縄、朝鮮半島の海岸部の林下に分布する常緑低木で樹高2～4m、株立ち状。枝はまばらに分枝し雌雄同株。名称は葉が掌状に深裂することに因る。なお別名テングノウチワは疫病を追い払い、魔除けになるとの縁起からつけられたもの。属名のファッシャは八手の読み、ハッシュュに因み、種小名は日本。性質は丈夫で土質を選ばず、栽培も容易であるが乾燥を嫌い、陰樹のため半日陰が望ましい。特異な掌状の厚い葉は裂片数が7～11個に深裂するが、偶数はないと言われ通常7～9個となる。先端は鋭尖で鋸歯があり、幹の先端に輪生状に互生し葉柄が長い。葉が落ちた跡は葉痕が明白に残る。花は晩秋、先端に球状の散形花序が集まって大きな円錐花序をつくる。花弁は小さいが花と茎が黄白色が目立ち、他の花が少ないため、気温が高い日はハナアブ、ミツバチなどの訪花昆虫が集まる。両性の花は自家受粉を避ける仕組みの雄性先熟で、先の雄性期では5個の花弁と5本の雄しべの雄花が先に開花し、花弁と雄しべが落ちた後に5本の花柱が発達して雌性期となる。また幹の先端に開花するので、生長点が消失するが、下方から腋芽を生じ伸長することを繰り返す。これを連軸性分岐と呼ぶ。果実は翌春黒く熟し、ヒヨドリ、スズメ、カラスなどが採食する。近年の地球温暖化の影響や野鳥による種子散布で、分布域を広げている。陰樹であり扱いやすいため、公園樹、庭園樹、目隠しなどに広く利用され、また掌状の葉が人を招くとの縁起から飲食店の玄関わきに植栽されることもある。ヨーロッパでは1858年に入り、アオキとともに日陰に強い日本の植物として珍重された。ヤツデはどこにでも普通にあり見慣れた樹木だが、特異な性質や、晩秋の開花にも目をかけていただきたい。



ヤツデ雄性先熟 (岸氏提供)



ヤツデの花序 円錐花序 (石谷氏提供)